

「いつも喜びなさい」

イザヤ書
ピリピ人への手紙

第26章1節～6節
第4章2節～7節

説教 岡村 恒牧師

「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。」(4節)《喜びの手紙》と呼ばれるピリピ人への手紙は、明日をも知れぬ身のパウロが、繰り返し《喜びなさい》と語りかける不思議な手紙です。たとえ明日この命が終わるとしても、それでも喜びことができる《希望の根拠》が記されています。

この手紙を受け取ったピリピの教会には喜びが欠けていたようです。1人の女性と牢獄の獄吏一家から生まれたピリピ教会(使徒行伝 16章)では、女性の働きが重要だったようです。ところが、ユウオデヤとストケの間に、どうしても一つ思いになれない現実がありました。いつも喜びの歩みをしたいと願いながら、なお克服できない人間の弱さに直面していたようです。

十字架に敵対する人々のために涙して祈るパウロは(ピリピ人への手紙 3章18節)、何とかして教会に豊かな喜びの歩みが回復されるようにと願っています。鍵になる言葉が響きます。「あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。」(5節)それぞれが自分の正義を主張し合い、非難し合うような現実には、「主は近い」という言葉が光を投げかけます。やがて終わりの日、主イエス・キリストが再び来て下さる。この約束が、私たちの人生全体をひっくり返してしまうのです。

今、私たちが抱えている信仰の戦い、悩み、悲しみはいずれも無視することのできない重さを持っています。どうしても許せない思いや、目をそらすことのできない悲しみに、私たちは押しつぶされそうになります。しかし、「主は近い」という言葉は、私たちの視野を広げ、これまで目に入っていなかったお方へと、私たちの視線を向けさせます。「いつも喜びなさい」、「何事も思い煩ってはならない」と言われても、どうしてもそこから目をそらすことができない私たちですが、それでも「主は近い」のです。この言葉の深い意味が、直前の3章20節では次のように語られています。「しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。」

私は来る、と宣言された主イエスは、私たちのために場所を用意して、再びおいで下さるお方です(ヨハネによる福音書 14章1節～3節)。主の再臨の日、新しい天と新しい地がやって来

ます。そして、「彼は、万物をご自身に従わせよう力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さる」(ピリピ人への手紙 3章21節)のです。「主は近い」、この言葉が指さしているのは、この終わりの日、終末の出来事です。

私たちは皆、ここに描かれている人間の現実と無関係ではありません。地上のこと、自分自身のことにばかり心を奪われていて、神を思うことができずにいます。私たちは皆、神を神として拝むことができず、神に背を向けて歩む罪人です。終わりの日に、神のさばきによって滅びと絶望だけを受け取るべき者です。ところが、主イエスがこの私たちに代わって神のさばきを引き受けて下さったので、誰でも「御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得る」(ヨハネによる福音書3章16節)ようになりました。

「いのちの書」に名を書きとめられているながら、和解と愛の交わりを回復できないでいる信仰者のために、信仰の戦いの中でもがく者のために、聖書は、「主は近い」と語るのです。そうして、私たちに《いつも喜び》歩みが与えられていることを明らかにします。私たちの信仰が力強く、揺れ動くこともないような信仰だからではなく、ただ、神の約束が、神の真実だけが私たちの喜びの根拠だと宣言するのです。

私たち自身がユウオデヤとストケであることを知るたびに、聖書の約束の言葉が響いていきます。私のために、信仰の友が、主ご自身が執り成しの祈りを捧げ、終わりの日の希望を指さして下さいます。「いつも喜びなさい」という言葉には、それを可能にする約束が伴っています。「主にあって」という言葉です。主ご自身が一緒にいて下さる、主ご自身に結びつけていて下さり、包み込んでいて下さるのです。

主イエスが十字架に架かって死んでまで、私たちを、神に感謝して生きる者へと創り変えて下さいました。洗礼を受けて、主に結びつけられて歩み始める時、私たちの人間関係までも変えられていきます。主が来られる時まで、確かな神の平安が、私たちを守り導いて下さるからです。「主は近い」。この言葉に、私たちは希望を与えられ、その日まで、喜びを抱いて歩むことができます。この約束が確実な約束だからです。

(記 岡村 恒)